

小笠原島記事

十六

和書門類			
二九三四五	二七	一三	三三
號	函	架	冊

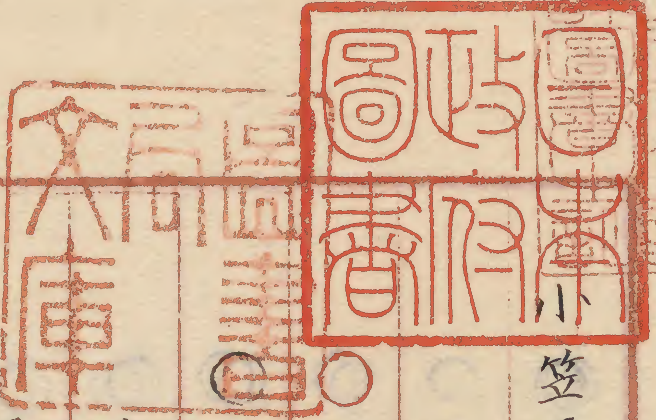
內閣文庫			
二九三四五	三三	一四	七三
號	冊	架	函
和書類			

內閣文庫		
番號	和	29345
冊數	33(18)	
函號	173	181

地七九

内一〇八六六號





笠原島紀事卷之十六

内一〇八八八號

目錄

○明治六年ノ下

開洋社ヲ結ビ小笠原島近海ニ捕鯨セシ事ヲ

東京府下神田富山町平民渡邊一造岐阜縣貫

属士族平島正彪連署シテ東京府ニ出願ノ權

興

○同願書

○同規則書

○同鯨漁仕法書

大政

○近海漁業ノ者諸漁ニ妨害アラシキ事ヲ疑惑シ
故障ヲ訴フ話

○小笠原島開拓ヲ後ニシ捕鯨ヲ先ニスルノ議
六月十八日先是當三月十三日御下問尚本月
十四日塚本少内史ヨリ再問ノ小笠原島處分
本省注視上申ヲ草シ省議ス

○同上申草案

○同塚本少内史ハ返翰案

○石上申日付宮本大丞ノ議

○同考法局ノ議

○七月十四日塚本少内史ヨリ可否ノ回答ヲ促
来ル

○同来翰

○同十七日又少内史ヨリ催促ノ書翰来ル

○同来翰

○同廿三日捕鯨社再願書ヲ東京府へ出ス

○同願書

○同藤川三溪建白

○同廿三日少内史再三回答ヲ督促ス

○同来翰

○同廿七日在横濱英人トブリユ一、セイヌスラ
ウエリニヨリ外務卿ハ書翰ヲ進出シ小笠原
島ニ渡海甘蔗培養ノ為同所へ永住無給ニテ
皇朝ノ事務ニ関ラン事ヲ請フ等ノ件ニテ

○惘願ス

○八月十日少内史ヨリ小笠原島事件主任ノ者
一名明後十二日参 朝スヘキ者ヲ達来ル

○同十二日正四位大原重實参 朝少内史面晤
兼テノ御下問可否ノ上申ヲ促ス

○同十三日外務卿先是清國ヨリ歸 朝ニ付省

議ノ上申ニ小笠原島関係書類三冊地圖一鋪
ヲ添進達ヤラル

○同月日時不詳亞公便テロシヨリ彼本國政府へ
小笠原島一併上陳並同政府ヨリノ指令ヲ密

ニ外務卿種臣ニ告示ス

○同上陳譯文

○同月十九日先是捕鯨社中ノ者近海濱へ出行
シ故障ノ漁父等ハ遊説シ豫ノ納得サセシメ
本日再三捕鯨開業免許ヲ東京府ハ懇願ス

○同願書

○九月廿二日先是捕鯨許可ナキラ以テ社中右
ニ疑惑ヲ生シ議論沸騰因テ本日又歎願ヲ東
京府ハ懇願ス

○同願書

○同藤川三溪カ達白

○十月七日於東京府陸地距離海里七十里以外
ニ於テ捕鯨ヲ免許セララル

○海里ノ定

○十月三十日捕鯨傳習トシテ亞人二人雇入免
狀願

○同東京府ヨリ来翰

○十月末翰日附先月十三日進出ノ雇入條約書
欠文アリ因テ本日改テ東京ヨリ達来

○同来翰

○同條約書 二通

○九月廿五日森山七等出仕書翰ヲ塚本少内史
ニ贈リ小笠原島事件御決議アリヤ否ヲ問

○同書翰案

○十一月十四日大藏省ヨリ捕鯨船旗章及相圖
吹貫發炮等外國船觸目モアルベケレハ豫テ

心得ノ為ニ報知ストノ書翰来ル

○同来翰

○同廿八日捕鯨船旗章以下ノ事ハ横濱毎日出

板外國新聞ヲ以同社ノ名ヲ署シ布告セハ可

ナリト告知ス

○同書翰案

○十二月三日太政官ヨリ捕鯨船旗章以下ノ件

々為心得御示令アリ

○同御示令書

○同九日外務卿再ヒ小笠原島御處分御決定請

求ノ上陳スラル

○同上陳

○同十日頃日省議スル所アリテ捕鯨船旗章ヲ

谷國公使館領事館へ布告ス

○同書翰案

○同御示令書

○同十二日大藏省へ各国公使領事館へ布告セ

ニ者ヲ報知ス

○同十三日大藏省ヨリ捕鯨船旗章類雛形ヲ達

来ル

○同來翰

○同離形

○同廿三日小笠原島ハ御國版圖タル儀判然ニ
付今後居留之施設ヲ以テ島民撫恤土地取締
及船艦往來之規則等ヲ立漸々殖民漁塩種藝
ヲ始土地適宜ノ利益ヲ興シ全島羈縻ノ術ヲ
被為盡ノ御主意タルヲ以テ大藏海軍兩省協
議差向着手ノ順次取調可伺出告御指令到來
同御指令

同廿四日史官ノ書翰ヲ以テ捕鯨海程七十里

以外ハ定ラレシハ何ノ故ナルヤヲ問フノ書
翰

Vertical columns of faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.



小笠原島紀事卷之十六 内一〇八八號

却說モ藤川三溪ハ小笠原島ニ民ヲ移シ土地ヲ開拓

ル也甘蔗ヲ植着ケ培養ヲ勵精シ砂糖ヲ盛制セハ洪

益ヲテ移民過ニ生業ヲ得ヘシ其ハ南海ノ島嶼地

味及時令較相同ケレバ也柳琉球諸島ヨリ出ス所ノ

砂糖ヲ幾千萬斤島津家祖米ヲ成シ砂糖ヲ収納サセシ

ム是有益ノ證也ト論說ス衆議ハ之ニ反シ捕鯨ヲ先

ニシ其益ヲ以テ開拓ヲ籌ル方兩全ノ策也ト山口縣

貫属宇喜田八郎青森縣貫属三橋貞行岐阜縣貫属平

島正彪磐前縣貫属遠藤永思大分縣貫属小河一敏京

都府平民小川其枝東京府平民伊東晴庵九條家塩小路光種同高橋小十郎ヲ始其他數名就中第一大区一小區神田富山町平民渡邊市造初曰幕臣御一新後請テ帰商ニ民藉ニハハ在斯事件ニ長ニ且其要路ニ知己多ヲ以テ專商量シ既ニ旧幕府中中濱萬次郎建白シテ鯨漁ヲ起シテ小笠原島近海ニ捕鯨トシ先蹤モアレハ願テ叶ハサル事ヤハアルト市造正彪願主ト為リ同六月十五日其管轄東京府ニ出願ス

奉願上候口上

私共

年来外國鯨換法多實際ニ其大利益アル事ヲ熟知シテ
 寸今般開化日新近々鯨獲ニ相宜可申法時解ニ立入り
 召外國ノ仕法ニ基キ鯨獲ヲ近海ヨリ完キト度多ク有候
 以爲外國人ニ裁判之上便宜之仕法有立會社ヲ法ニ早ニ取
 掛リ申度志願ニ有則別紙仕法書系會社規則ニ相添同
 多以附申許容被成上置其様々致上

明治六年六月十五日

岐阜縣 平島正彪

第一大区十一小區 神田富山町

平民 渡邊市造

大久保一翁殿

規則

一 今般捕鯨ノ法ハ本邦舊来ノ捕法ニ異ニシテ遠クハ大洋上ニ出テクハ島嶼ノ間ヲ巡リ少人数ヲ以テ多クノ獲ヲ獲ル法ニシテ實ニ便利ノ良法也此法ニ隨テ此方利ヲ得以テ我全國ノ富強ヲ助クルハ我同志ノ希望スル所也

一 全國富強ヲ助クル基ヲ建ルハ廣ク日志ヲ暮リ普ク衆人ト之ヲ共ニスルニアリ於是此捕鯨ノ會社ニ結ビ漸ク獲ヲ方利ヲ開ク其基礎ヲ建ルニテテ發起人トシ述ヨリ加ハル者ヲ加ヘテ入社ノ口ヲ四百圓ト相定メ是ヲ

一 賤本トス入社ノ株ハ五十口ヲ限リ申事

一 分割法ハ仕法表面ニ通相定メ申事

一 入社ハ其人ヲ撰ニ可申事

一 會社諸役員ハ同社中入札ノ以テ定メ可申事

一 社中ノ者不條涅ノ儀ヲ行ハズ起人タリトモ除名致シ得

一 入社後無故ニテ家儘ニ退社不成立無餘依ル者

ハ社中衆議ヲ強ク相賤差戻可申事

一 本股出先ニ於テ不平等ノ儀為之後日露形ニ及ビ其

其罪ニヨリ相劣後ノ罰金可申事

一 會社中一和親睦ナルヘシ何事ニヨラズ同心協力

ニ衆議ノ一ニシ区々不互成様心掛リ可申事

一會社ニ關係シタル金銀ヲ新ニ貸借スルヲ許サズ若シ
私ニ貸借シタル者後日顯ハルニ於テハ相當ノ罰可
申付事

一毎會ニ互益ノ議論ヲ貴ヤシ實効ヲ妨クヘカラザル
事

一諸帳目ハ丁寧嚴密ヲ盡シ社中ノ物慾無之様可為
肝要事

一餘漢ハ多少ニ拘ハラズ本帳ヨリ報知次第社中
寄り筆算相立可申事

一會社至急ノ回章アリ無効留置或ハ急用ヲ知リテ
カテ出社リ急ル者相當ノ罰ヲ付事

一但シ病氣必用者ニテ出帳不相叶部ハ其者早ニ
可申出事

一占納税金及賣捌金配當者ハ為密丁寧ヲ盡シ可申
事

一社用帳面ヲ社外人ニ披見スルヲ許サズ尤モ入
社望ノ人ハ社長聞届ノ上披見為可申事

一総テ物每一已ノ専斷ヲ以テ引受候義堅ク不相成
事

一 會社ニテ飲食ニ無用ノ馳リヲ禁ス尤自費タリト
モ堅ク不相成ト事

一 社中私用ニテ遠行或ハ區區為私を節ハ社中ノ可ト出
ル事

但登壇ノ後届出儀ハ不取ト事

一 非常ノ天災等有之節ハ社中一統ノ山事ニ依ヘハ
其損失ハ一同タルヘキ事

一 會社ノ得失ニ関スル事ハ銘々聞出ニ次第早く可
申出事

一 歳々仕拂殘積金削減用意ノ備ナレハ社中一統

立合封印取置儀事

但此ハ預ケ置ニ社中議決ニテ取ト先方可撰

金事

一 罰金其外取立金ハ総テ別封ニ取ニ準備金ニ附ス

ハキ事

右者御國益ヲ第一トシ私利之ニ次ク正直公平ヲ
以テ取扱儀ハ此ハ社ノ規則ト取シ其ト上ヲ決テ
此條例ニ背ク間敷也

捕鯨會社

發起人

鯨漁仕法調書

金一萬二千圓

本船一艘船具一式添

船長廿二十三間ヨリ
三十間迄積高三百噸

ヨリ六百噸ヲテ新
古ニ寄リ價増減レ

尺中間ヲ以テ高ノ如

小船四艘道具一式添

船長廿三十尺並ニ附
屬器價

金五千圓

漁法諸器械

船附諸器品ニ至ルニ
テノ代價

金二千四百圓

會社一々年諸入費

金三千六百圓

鯨油樽二千四本代價

但一樽ニ付六斗ニ升入
尤西洋樽ニテ價一圓

半見核リ

金三千圓

本船并小船諸器械修復

料

役員給分

日社長一人一月百圓

監事二人一月七十圓

會計二人一月五十圓

書記一人一月三十圓

通辨二人一月廿五圓

應接四人一月十五圓

頭二人一月七圓半

小遣二人一月五圓

右會社勤員此々年月給

金四千八百六十圓

船中漁夫月給

船長

金千八百圓

外國人二人一々年月給

但一ヶ月一人一々七十五圓
外漁得ニテ分割差遣假事

金三千零六十圓

漁船乗組三名外通事

金二千圓

一人小遣一人右五人一々年旅費

金二千五百零八圓

鯨船乗勤員ヨリ以下四十

七人一々年賄料

金二千六百圓

上等七人一月一人七圓下等
四十人同一人四圓宛

金二千四百圓

船中一々年雜費

大畧通計

金四萬七千三百八十八圓

右一々年ノ賸本ニシテ内ニ萬圓八一株四百圓
五十株ヲ以テ創業ノ出金トシ餘ハ漁得ヲ以テ
連綿差繰ノ見積也

漁得

金千二百五十五圓五十錢

鯨一才ニ日油廿四石八斗

一斗ニ廿價五圓六錢二厘
五七ノ積

金二百廿五円

鯨一本ニ骨七百五十斤
一斤ニ百價三十銭積

大畧通計

金千九百八十四円五十銭

鯨八種、有之中鯨ハ三十尺ヨリ三十五尺長
大ナルニ至テハ六十尺ヨリ七十尺余ノ大鯨
アリ今概畧算シテ中鯨ヲ見積ナリ

右一々年漁得大凡六十本ノ見込代價

金十一萬九千零七十円

入口

金五千九百五十三円五十銭
金三萬九千六百九十円

賣捌高廿方ノ一上税
同三方ノ一會社等開拓準備金

金二千九百七十六円七十五銭
金四萬七千三百八十八円

賣捌高四十方ノ一衆組漁夫ノ分割車
一々年諸入用内ニ萬円ハ創業前入
社人ヨリ出金并次年取本トス

右糶金九萬六千零八円廿五銭也

差引餘贏

金二萬三千零六十一円七十五銭

円

金七千六百八十七円二十五銭
金一萬五千三百七十四円五十銭

發起人收納
入社人五十口配當金
但一口并金三百零七円四十九銭也

右者一々年出納調ノ概算也尤洋中ノ活業ニ付

年々利高之不同有之候事

初捕鯨社ト稱ヘ
 後因洋社ニ改ハ
 東京府之ヲ大藏省ニ告ケ可否ノ指
 令ヲ請フ大藏省近海ノ管轄縣ニ故障ノ有無ヲ問フ
 房総ノ漁村網ニ妨害アリト唱ヘテ歎訃ス是ハ漁
 夫等西洋鯨漁ノ方法ヲ知ラネハ従前鯨漁ニ所謂鯨
 網ヲ引クト心得誤リニヨリ在斯故障ノ訴告ニハ及
 ヒシナリ此為ニ数月荏苒可否ノ指揮ナシ抑捕鯨開
 業ノ權輿ハ嘗テ三溪小笠原島ニ天然生ノ甘蔗蕃衍
 スト聞南海諸島中ヨリ出ル處ノ砂糖夥シキ製シ高

ニテ其利潤幾干ナルヲ知ラズ小笠原島モ南洋中ノ
 離島天然ニ生シ培養セハレドモ繁衍シテ其高文余
 至ル是其他ニ相應スルニ因テ也培養セズテ如
 此況哉培養スルニ於テテヤ其他奇珍ノ草木藥種介
 魚等モ夥カラス且鯨魚ノ多キハ太平洋中最第一外
 國人モ同所ヲ鯨漁ノ目的トス如此海陸ノ有益ヲ括
 テ外國人ノ所有トスルハ報國ノ志無キニ似テハ
 速ニ開拓シテ皇國ノ版圖ヲ示シ永ク他國ノ所有
 ト為サバラシムベシト議ス衆ノ所論ハ事ニ先後ア
 リ固ヨリ小笠原島ノ皇國版圖ノ一ナルハ今新シ

ク論ナル迄モナシ然レモ開拓ノ鴻業敗債ノ基本十
分ナラザルハ半ニシテ止テ得ス廢スルニ至ラン既
ニ文久ノ度舊幕府開拓移民ノ手始テ開カレシカド
モ開拓ノ賞賤ト有益ノ利得ト比較スレバ出賤ハ今
日ヨリテハ賤ハ何時ヨリトノ目算立難ク遂ニ廟議
一變ニテ廢止スルニ至レリ今有志ノ徒テ募リ賤ヲ
聚メ開拓ニ手ヲ降ヌトモ固ヨリ烏合ノ出賤不足ニ
至再々聚メシ事難カルヘシ今世上一般利ヲ先ニス
ル人情迂遠ノ利潤ハ人氣ノ帰シ難キ所ナレハ姑ク
開拓ハ後ニ延バ捕鯨ヲ先ニ開業セハ眼前ノ利ニ心

知
識

勇ニ拓カスシテ衆ヲ募リ本資ノ出金溢ニ成功スベ
シト議ス兩説ノ開論數回ニシテ捕鯨ヲ先ニスル方
可也ト決シ因テ捕鯨社ヲ組シ鯨漁ヲ開業シ其益ヲ
積テ開拓ノ賞賤ニ備フヘシト主法ヲ定メ規則ヲ立
出願ニハ及ヒシトソ既ニ鯨漁ノ有益ヲ説キ文久年
間中濱万次郎カ建言ニ因テ舊幕府之ヲ許可シ小笠
原島近海ニ至リ漁業ヲ開キ鯨ニ尾ヲ獲タリ然ルニ
幕議一變シ小笠原島在勤ノ幕吏ヲ始ハ大島ヨリ引
移セシ男女ノ島民サヘ引返ス時ノ勢トナリ萬次郎
カ鯨漁ヲ永続ノ方法ヲ失ヒ遂ニ廢止スルニ至レリ

文
收

然ル先蹤アルヲ以テ三溪カ同志驟リニ捕鯨ノ業ヲ
開カ一事を急ギシ也

却説魚ヲ大減省ヨリ小笠原島廢置ノ御指令ヲ請ヒ
シカトセ本省ノ御下同意見ノ上陳ナキニ因リ去ル
十四日少内史ヲ以テ御指令案ヲ附シ御再問アリシ
カバ木日六月十日上陳ノ草案ヲ作り省中ニ廻達シ各
局ノ意見ヲ試問ス其案如左

三條太政大臣殿 上野外務少輔

小笠原島之儀ニ付中島組稅權額申立書系大藏省
上達之書同共添以下問之趣發惠考其案日島之島家而屬

形事著一々素テ管轄スルベシ然レニ僅歲ニ
外國人操業スルノ地ニ去ル一或ハ在苗ナク若者十人
由ニ付去ル年同幕府始メク外國船等と造一各島格と
巡知一近傍之各嶼ニ去ル追標取立ク以テ吾所屬と
吏と思フク其島ノ人民ヲ管一其後其後物事多端遂
中島之事然熄む然レニ維新ノ時ノ膏ク現ニ吾所屬
多ク島嶼と度分ニ措キテ義遺憾不尠作併正國費多
端之際物產蕃殖之目達未定之島嶼ハ許多之口國賦を
採没スル由亦多ク厚ニ義レ由是大藏省上陳之度分
ニ措クと為す所以一々費用と惜一む之と重り

大藏省

亦不以已義之有之也、只以海分、措く、為り、付、外、船、
彼、島、崎、と、何、と、出、帆、と、能、ふ、と、又、彼、地、と、物、産、と、積、束、と、
是、と、黙、許、し、と、輸、出、合、し、め、さ、る、と、不、以、是、也、甚、快、然、と、
る、と、有、り、以、將、来、之、有、為、に、関、し、他、島、同、島、に、拓、樹、殖、等、之、
後、ハ、暫、間、措、と、と、差、向、並、山、縣、管、轄、と、為、し、其、任、官、一、兩、名、
差、置、十、五、之、體、裁、を、強、ら、れ、只、水、食、を、當、用、と、是、と、の、
目的、と、以、と、縣、之、出、張、所、を、開、き、輸、出、入、も、無、税、と、免、
状、と、与、一、區、々、條、物、改、定、と、後、ハ、公、然、た、り、開、港、地、不、外、と、
と、も、吏、道、之、間、ハ、各、國、之、使、ハ、布、告、し、雜、居、外、國、人、之、為、の、
前、書、之、の、教、と、許、容、と、有、り、者、と、定、め、委、任、ハ、依、令、神、志、則、

港、に、架、彼、島、之、小、輪、出、と、願、ふ、時、差、計、
与、及、且、存、之、如、ク、體、裁、を、強、ら、れ、一、二、之、官、員、を、差、置、
區、之、以、費、用、も、更、小、些、少、大、務、省、と、傷、と、
其、右、之、通、^定、_定、を、以、外、人、之、許、容、と、有、り、者、
可、相、同、と、依、り、下、向、之、書、類、一、同、區、却、此、所、申、進、
明治七年六月十一日 單

別紙

塚本少日史傳

外務大少丞

小笠原島之儀、有大藏省、
被、兼、知、之、右、上、野、外、務、少、補、
下、向、ハ、省、議、を、附、し、上、陳、
之、類、

考印石多江義和多々及回海也

明治六年六月十八日 草

草案成テ尚省中ノ意見ヲ問大丞小一カ建議如左

小笠原島ハ撮尔小島ニシテ之ヲ捨モ惜ムベシ保

ニハ入所出ニ償ハス難勸ト云ベシ然レ凡保國ノ

主意ハ獨其利益ノ有無ヲ計較シテ非可取捨地勢

ノ我ニ害アリ彼ニ要アル所ハ費用ヲ盡シテモ是

ヲ守護ヤガルベカラズ小笠原島ノ如キ外國人此

地ヲ根據トシテ我ニ抗極スルノ有遠憂地ニ非ス

ト雖茲ニ一ノ未來ヲ可深思論アリ此島ハ東南洋

群島ノ鼻祖ニシテ是ヨリ迤南ニハ無數ノ島嶼並

立シ中ニハ巍然タル一大洲ヲ成シ我本州ノ廣慶

ニ讓ラサルノ邦土ニホヒ而未タ歐西各國ノ據有ヲ免レ

誰ノ所轄タルヲ認定セズ混沌未開ニ属スル肥饒

ノ良地アリ今政府多端未タ閑手ニ違アラズト雖

數年ヲ出ズシテ我邦人奉テ座視ニ忍ガル勢ニ至

ラニ此時ニ當リ其各處ニ往來スルノ船舶必ス小

笠原八丈ノ諸島ニ經由ヤサルヲ得ス此ニ至リテ

此小島ハ初テ其用ヲ顯シ最要ノ驛亭ニシテ度外

視ニスベカラザルニ至ラン然レ此時猶其期ニ迫

大政

ラズ今只此小島ノ開創而已ヲ目的トシテ費用ヲ
銷盡スルハ良策ト為スニ足ラス然レハ差當ノ所
不ハ座外視ノ三字大ニ其要ヲ得タルニ似タレ
税関ノ同ハ實際處分ニ窮スル事也度外視スルト
ハ彼地ニ向出帆ヲ願フトモ彼地ヨリ産物ヲ積来
ルトモ是ヲ黙許シテ輸出入セシムルノ意カ甚
快然ナラザル事ナレバ費用ヲ惜ムノ意ヲ重トス
レハ止ラ得サル也然レバ茲ニ一ノ願アリ今ヨリ
此外國船ノ彼地ニ往復スルノ便ヲ乞數十月ノ食
糧調度ヲ齎ラシ我官員ヲ在住マシメ
藤川ノ如キ
志願ノ者ヲ

出ス 總テノ所方ヲ調置也條約改定ノ時ヨリ彼地
テ一人開港場トナシ十分ノ體裁ヲ張ラズ僅ニ薪
水其他些少ノ物産出入ヲ許スマテノ事ニナシ置
ハ我版圖タル明ニシテハ賞ノ多寡大藏省ヲ傷マ
シムルノ甚シキニ至ラズシテ前ノ不快ヲ除キ幾
程ナク南洋諸州開手ノ便ヲ得ルニ至ラシカ

宮本小一

考法局ノ建議スル所正ノ如シ
即今小笠原島諸島ハ現在ノ事實ニ於テ在レバ無
キカ如ク内國ノ利害ニ於テ差テ關係ナキニ似タ

文

り然レモ今般改テ度外ニ措ト定ノ一度國外ノ様
ニ見倣ス時ハ若後來他ノ一國ニテ此島ヲ掠畧シ
自領ト主張セバ我國又夫ヲ承領シ其國ノ属地ト
認メサルヲ得ズ然レハ再度時勢ニ依リ我等ノ版
圖ニ復帰セシムルヲ欲ストモ事已ニ遅カルベシ
故ニ即今俄ニ手ヲ下シ開拓ヲ初メ費用ヲ重ル事
ナシトモ只海外各國ヲシテ彼諸島ハ我々版圖内
ニ在ル事ヲ承認セシムル様ノ處置大要ナルベシ
彼ノ諸島ノ利益ニ至テハ已ニ多少ノ物産モ在ハ
必貿易上ニ於テ幾多ノ利益在ニ依ル事ナルベリ

最宮本氏未來テ深思スベク論アリ云クノ説明論
遠見トスベシ

次ニ此諸島ハ前躰日本政府諸各國ト和親條約ヲ
結ヒシ前ヨリ外國人モ来往マシ所ト見ヘ且内地
隔絶ノ諸島ニテ居住ノ人モ多クハ外國人ニシテ
自然事實ニ於テ差別アル事ナレハ未開港場ノ事
トハ云ヘドモ格別ノ取扱相成トモ條約面ニ對シ
岡キ難シト云事ハ差テアラサルヘシ
差當リ進山縣管轄トシ判任官兩人位差置云云ニ
テモ可然歎ナレモ先彼島ハ暫時海軍省ノ所轄地

同林ニシ一船艦ヲ差出シ置其船將ヲシテ諸島ノ
知事ヲ兼シメ保護開轄ノ道ヲ立ルモ可ナランカ
然レハ船ヲ繫クハ何地ニ於テモ費用ハ大概同一
事ナレハ只無事ニシテ内港へ繫キ置キ彼諸島海
ニ置キ格別ノ入費ナラザルベシ且海軍ノ運用航
海鍊熟ノ為ノ大益アル更ニ疑ベカラズ終リニ利
害云々ノ説ハ摺キ當今我國ノ属ト自ラ思而已ナ
ラス外國人迄モ左承認スル處ノ地ヲ差立タル故
障モナク自ラ捨テ度外ニ措トハ抑何ノ意ナリヤ
解シ難シ今譬是ヲ捨ルニモ相當ノ人ヲ遣シ實地

ノ形情猶又能ク取調シ上ニテ彌不用ト決シタル
時ノ事トスベシ

吉原

海軍ニテ管轄スル方可然 為

本省ノ議斯ノ如シトイヘドモ尚決シカタク事ヤア
リケニ上陣追々延引ニオヨヒシカバ同七月十四日
明毅再ビ左ノ書ヲ贈テ上陳ヲ促ス

加勢大少丞 塚本少丹史

此中

去月中小笠原島之儀及此間合置キ處右ハ差急ニ
件ニ付早ニ此回答者トテ夜中陸中迄也

大文

明治六年七月十四日

追々先般ノ進置キ小笠原島洲等國内省以備
置レ在リ後借因成程ノ進置也

此書来レトモ未夕上陳ヲ決セス進出延引ニ及ヒシ
カハ同十七日復催促ノ書簡ヲ来ス

外務大少丞

塚本少内史

去ル十四日小笠原島之件及此督促等件速ニ以指合
等々ノ事実善安ニ起居大務省カハ此等事ノ四回各
有之度為リ進置也

明治六年七月十七日

如此促シ来レ尺景範尚添念スル所アリテマ忽卒ノ
雄断モ無ク又日數廿日余ニ暨ヘリ
却説モ捕鯨社中ニ於テハ豫テ進出ノ願書數月ヲ経
レトモ許可ノ指令無ケレハ入社ノ者ノ内疑惑紛紜
生リ必後患アラシキ事ヲ推察シ三溪其筋ニ就テ左ノ
書ヲ進出ス

再奉願上之書

捕鯨ノ大利有ル事偏リ世人ノ知ル所ナリ然レ尺
大利有ルモノハ必大費アリ其利ヲ計テ其費ヲ計
ラス故ニ偶此事ヲ企ルモノ有リト雖モ却テ損ハ

大文

ヲ招テ悔ノ念ヲ絶ツニ至ル此弊ノ由テ来ル所ハ
其財本乏ノ其力足ラズ其事ヲ計テ精シカラザル
ニアリ此ニ依テ我輩新ニ社ヲ結ヒ廣ク同志ヲ募
リテ金ヲ醸シ之ヲ約スルニ規則ヲ以テシ之ヲ所
スルニ公正ヲ以テス仕法ハ外國人ヲ師トシ之ニ
雜ルニ内國人ノ能ク鯨鯨ニ精シキモノヲ以テ遍
ク衆議ヲ取リ敢テ私見ヲ容レズ遂ニ此願書ヲ奉
ルニ至ル早ク此御許可ヲ得ルノ上ハ先ツ近海ヨ
リ取始メテ其費ノ多少ヲ量リ漸ク積ニテ環海ニ
及ホシ其利ヲ奉テ内國富強ノ一助トモ成サント

欲ス然ルニ御許可之御沙汰モ未ク之レナリ空ク
日月ヲ費スハ我輩最憂トスル所也其憂ト大ル者
ハ此迄苦心シテ取立シ社中モ余リ御許可ノ御沙
汰ナキヲ見テ願ノ叶ハサルカト疑ヲ生シ是迄談
判セシ外國人ヘモ違約ノ面目ヲ失ヒ此業ノナラ
ザル前ニ多少ノ費ヲ生シ此力爲ニ瓦解ニ立至リ
テ折角企シ御國益筋ヲ失ハシ事ヲ恐ル仰願クハ
高位君子幸ニ此微衷ヲ憫シテ速ニ此事ヲ許シ給
ニテテ懇願切望ノ至リニ堪ハス敢テ再ヒ之ヲ請
ク奉ル

七月廿二日

藤川三溪

如此歎訴スト雖モ未タ評判決定ニ至ラサルニヤ可
否ノ指令モ無シ因テ社中挙首ヲ疾シノ額ヲ蹙ノ一
日千秋ノ思ヒヲ為ス而已

同廿三日再三少内史書ヲ本省ニ贈テ上陳ヲ促ス

外務省 塚本少内史

市中

小笠原島之件 長波及少留任其交未此四在昔之有
大蔵省ヨリ同出其義ル有之其意建 在源議有之其極所
至多同能之遂初之其意建 可者之毎以収額之

此島越之其意建 可者之毎以収額之

明治五年七月廿三日

促ニ来ル事再三再四情實迫切ナリトイヘ凡巴ニ外
務卿ノ帰朝近ニアリト清國ヨリノ報知モアレハ旁
上陳ヲ湍カニセス

同月廿七日英國人ドフリエト、セイ、ステウエソンヨ
リ左ノ書ヲ進出ス

抄者謹而下件ニ閣下ニ申上者抄者誠先人密ニ渡海致シ
砂糖培養方ニ為メ同出之取仕、年一度企望ノ自所家貴政府
之許可也受取度且其島ニおわく物者積臺有る毎路

大文

日本事務所扱下度義山備有許出下度也願其欲具

核原千八百七十三年七月廿七日

核原達五形方英人

ドフリエー、ビー、スラウエニソシ

外務卿

閣下

同八月十日少内史左ノ書ヲ贈リ主任一名参

朝ヲ促ス

外務大少丞

地誌詳長

塚本少内史

小笠原島之義廿夜尋問度有旨以候十二日午為第九時
之月之者一名出頭在極少達有之夜也

明治三年八月十日

同十二日一昨日ノ来翰ニ因テ本省六等出仕大原

重實参朝少内史明毅ニ面會ス明毅事情切迫ノ一

五一十及大藏省ノ注視最前ニ變リシ趣ヲモ懇話シ

御下問ノ意見上陳ヲ督促ス重實旨趣ヲ承諾シ帰省

長官ニ報ク先是外務卿種清國ヨリ帰朝アリシカバ

同十三日左ノ上陳ニ小笠原島関係ノ書留三冊小笠原島

地圖此冊ヲ添進達ス此書三冊ハ本省ノ原本ニ至

為ノ一時貸進スル所也

三條太政大臣殿

副島外務卿

小笠原島之儀 付上陳

小笠原島之儀 付中島祖稅推願申立書 其大省上
陳之書回共相添正垂問多教熟考之度日島之儀
其家部内多々委之 不誤論然り小笠原海不快あり
極民之方法と達は近年外國人居住之地と有り其委
此辛酉年間幕府の國多々其等と達し島務を巡知するに
更と置り土島之外民を管し更し諸書をも取置其物事
多端逐々五種之業と廢弛と然るに維新百度更張
之時會し却て是を度外小柄と有尤不可然況も其に但
國費多端之際一付小五子候に其益之義をも去て其外

差置其の横原港の物不積載小笠原島に向出港と願
ふも又彼島に土產移来り輸入を能ふ時は是を黙許
しと輸出入と之を不許是に快然あり其の如く取
諸般規則小異漸し之不相合是則度より置難き如小
島之儀に依り勘考其同島に在り其の暫く閑き其の海軍
省より為極不川位泊之船艦之内に縁台日一年一五度
試運轉其彼島迄は復た一の官廳取立尚又旧省官員
其省官其等々多々其島民を扶助其其の方法と設
其一其の家政府之保護中其其の民自家海兵に向し
送之物不願に免状收稅等之其其のと施す其其の儀

と書之如右ありて後附と以通信以来之便とす其家
刑民之日流移ニテ受者之実決せしめ本島へ福極進て子
拓漢極利と其トを以全島維持之目途ニ立おし其者
互更一古名号一應本島へ派出之他檢閲を致る以後之確
法可成立及之依此下向之書類返上且陸海軍之領を本島
條之書類三冊并繪圖面一帖お添は附上申す也

明治六年八月十三日

返り公文関係之書類三冊ハ返上之後之島部ニ送付

也

閣下書三冊ハ同十二月十日要用ノ事アリテ返却ラ
促セシカハ今日史官ヨリ返シ来ル考證ノ用早本省

ノ各庫ニ藏ム抑小笠原島事件ノ書類ハ去ニスル文
久三年十一月十五日江戸本城祝融ノ節命ノ灰燼ト
ナリ政府ニ傳フルモノ無ケレハ當時事件ノ関リシ
旧幕吏ノ私記或ハ好事家ノ叢書謾筆或ハ印本ノ野
史或ハ漂流人ノ申稟等ヲ抄録シ凡テ彼島ノ事ヲ書
載セシモノハ所見ニ隨ヒ寫シ加ヘ集テ概成スルモ
ノ一冊ニ小笠原島全圖ヲ附ス又小花作助ノ筆記中
小笠原島在民對話書一冊其他長崎人松浦東溪カ長
崎古今集覽附録外回集覽卷ノ一並細亞洲ノ部日弁
國ノ條下無人島ノ事件抄録一冊也其餘ハ舊記無シ
同月不詳米國公使テロシク外務卿種ニ面接シ二葉
ノ横文ヲ出シ密ニ指示シテ本年第四月廿三日我米
利堅人甲必丹ヘンヤミンヒースナル者余カ本館ニ
来テ面晤ヲ請フ余出テ彼ニ面會セシヒト云ヘ
ラク已無人島ニ至リト居スル事既ニ三年ノ久シキ

文

ヲ歷土地ノ人情属根了知ス然ルニ彼島現今誰主宰
スル者モ無ク島合ヲ以テ村落ハナセトモ土地ヲ何
レノ管轄トモ定メサレハ住民ノ保護ヲ何レハ仰カ
ンヤ是住民ノ安堵ヲ得サル所以也故ニ住民過半疑
惑ヲ懷キ唯氣運ヲ揣リテ一日モ鼻然タル事ナシ因
テ今般已ニ委託シ貴下ニ就キ自今ノ注目及方嚮ノ
問諱ノ永ク全島安堵ノ基礎ヲ定メント商議ス其事
情黙止難ク嗾カサレテ波濤ヲ凌キ則此地ニ航り來
レリ宜ク島中窮迫ノ情實ヲ洞察シ安撫ノ處方ヲ請
フ能ク哀訴スト報ク其情願理アルニ似タレトモ一

己ノ所存ヲ以テ指揮スベキ事件ナラネバ同日幸ノ
便ヲ得テ旨趣ヲ本國政府ニ上陣シタリシニ同五月
廿一日ノ日附ハシ政府ノ指令到來ハ其往復ノ書則
是也是ハ固ヨリ我政府ノ内諭ナレハ叨リニ口外ス
ベキニアラネト豫テ莫逆ノ交アレバ勤外ヲ以テ極
密内論ヲ洩ス也尤此一談ハ公然タル事ナラネハ宜
ク斟酌ヲ請フト内話ス卿其懇志ヲ厚ク謝シ握手シ
テ立別レ其後少丞平井希昌ニ命シテ翻譯サセシム
此書ハテロクカ密ニ洩スモノニテ後日ノ證據ニ
奉クベキナラネト其國情ヲ知ル一端ニ寫シ載セテ

参考ニ備フ

米公使テロニクガ米國政府、上申之書英文

純海

今朝申比丹ベニジヤミンビーノスある者来々、抄者ノ書

曰く予ハ米利幹の一民ノ一人島一名小笠原島
又勸念島云

ニ居候々々既々三年の久キと終る、乃夜君此

許ノ来々を彼島ノ臣民過半人救ノ候と受け此の郡

島ノ果々々、いつきの管轄有、や住人、ソノきの保護を蒙る

ヘキヤと確知、んたの事を、以ハ衆

此者猶彼小種、この尋向とあせ、ハピーノス之、お答て云く

此の群島を三の大島を併セたる總名々、曰く彼

理曰く勃然曰く米利是ヤ、其他小島多ク

先年コモドールペルリーの日本ノ航ノ条約を結ビ、内

其取隊を曾々、此群島小會セ、事ある、此時、方々

右取隊の門、私ノ濫長茶、云ハ、ペイリー島

小上陸、ト、合衆國の旗章と彰掲、ト之、對

々祝砲を放ち、之、小據有、セ、の禮を、以、ハ、千ハ

百二十年、英、國、軍、艦、私ノ濫長、私ノ千

人、と、以、ハ、此、島、と、占、居、ト、陸、地、小、標、柱、を、建、

羽、版、を、安、着、ト、ハ、群、島、英、國、の、管、轄、也、云、ハ、の、詔、文、を

刻したり此標柱銅版及石象國の旗章等々小なるり
然る小令を去る軍九年為日本大君政府一の官員
と派出一家艦六十員と其小此島を來りて日本國此
名を以て禮式新ノ誤歟此島と括有るは官員の多此島
其由や外國人の望の如く地者禮書試後一と島民
一尤為と許りて而して島中互住の外國人を以て
大君と彼等小存めると免許ありてを謝るゝの書
回を示し兼く之小記名調印せしめたり此島小此後
十四ヶ月の後り小人思く此國を來りて進へるとし
其後再び此島小來りて人島居住の人小米利幹口

五名英民十七名佛民四名及布哇民数名あり

彼利島ベリと米利堅一名及非勃島ポットの土人一名
たり

此群島各々英方里百十里あり而して天候甚
佳く地味實小肥なり尤産物を收穫するに
地多し而して漁利甚多し又ポットロイト云ふ
良港あり別々内港と稱すへき小何れも輪換の
船を爲すに船を深邊小別付け修程と此小
此程男徳の港なり島中五歳より十六歳位まで
の少年二十六人ありて更小字小入り智と増

一
一
一

の事を知れば是 全り土地を強者存の商の政法あり
ハ敢て開化ふ志を事とせば偶寛と受るの人皆由
之と許る小慶あり
ポルトロイト港ハ横濱港と距る事英里四百八
十里神戸港と距る物と五百里也日本國の開港
地は多港と云ふ道一と云ふ
甲比丹ビース入云つらく日本の官員此地を呂々
群島と居有ると云先也一時は群島一國と云
國人の居る在る地及貿易場ふりたり
甲比丹ビースを布哇島と云ふ馬家畜を夥し

く此島を輸入人と云ふは此島一國は先也
彼等何きの國法も法を御し而して各處及び
一般の事務と盛天ふらんよの意ありと云ふ
物者甲比丹ビース小峯へて云く拙者此島を國
下米國が知事と云ふ申し台衆國政府も果して
此群島と管轄するや又法と管轄するの權を需む
るやと知らんと云ふ又此島と云ふ島の管轄あり
と認らんす、時小峯よりハ甲比丹ビース又他の或る人
を台衆國の領事と云ふ事と云ふ島小峯の由りて云
欲と伺はんとして國と云ふ事の由りて後と云ふ

大 改

陳述し閣下の意思を述べらる也

テロニケへ米國政府の不知狀英文訳譯

曾くユモドールペルリール日本へ駐泊口し時

船隊中の一艦彼島しをえらし合衆國の各と以

て此島くを若有り口し一件既小島味と徑多を來る

小石船隊中の一艦の此島小島よりや更小國會の

多許を得し事ありて是後とて一と米政府に於て

彼海軍士官の前途と援助らるの旨何親と知

ら米國と万一合衆國の住民はをて何居と求

めん主意の爲小此島小階を何は是ら其所

同用。ハたが家政府より保護をあらる為の申許あり

又黙許ありき者共なりは景況の方つて彼者とも

其論にふれ地味上跡潤の土地の集り住せんと決りて定め

て帰郷の念なく合衆國の棄却せし者とともん

之ふ同て合衆國民たるの権の家とを確言するを廢

棄する者也

民ノ不貫徹ヨリ漢場鯨網ヲ援カバ尋常ノ漁事ニ

妨害アリト疑ヒ故障ノ申稟アルヨシハ前ニ云フ如

シ然ルヲ以テ方總ノ漁民等ニ西洋鯨ノ事業ヲ説キ

網ヲ用ルニ非ズ且近海ト云ヒニハ遠キ対國ノ海ニ

大 政

陳述一閣下の意思を述べたもの也

テロニケへ米國政府の不知状英文訳

曾々エモドールペルリール日本へ旅取ロト付

船隊中の一艦被島と見えたり合衆國の名を以

て此島と名有ロト一件既小島味と經多ク此島

小石船隊中の一艦の此島小島や更小國會の

多條と得ル事ありて後と一と四管政府に於て

被海軍士官の命と預助らるの旨何類と知

ら米國と万一金衆國の住民の住居と求

めん主意の爲小此島小島等何は是りの其所

同月十九日先是本年六月十五日進出ノ捕鯨一件ノ

願書可否ノ指令無ク其社中ニテモ大ニ疑念ヲ生シ

異論區々ナルヲ傳へ聞入社ノ志アル者モ時機ヲ圖

リテ加入セントモセズ粗雇入ノ内談ニ及ビシ外國

人ヨリハ確ト條約ヲ決定セン者ヲ促シ來レハ再願

書ヲ東京府へ進出ス抑此事ノ指令遷延ノ原因ハ漁

民ノ不貫徹ヨリ漁場鯨網ヲ援カバ尋常ノ漁事ニ

妨害アリト疑ヒ故障ノ申稟アルヨシハ前ニ云フ如

シ然ルヲ以テ房總ノ漁民等ニ西洋鯨ノ事業ヲ説キ

網ヲ用ルニ非ス且近海ト云ヒニハ遠キ外國ノ海ニ

同月十九日
先是本年六月十五日
進出ノ捕鯨一件ノ
願書可否ノ指令無ク
其社中ニテモ大ニ
疑念ヲ生シ
異論區々ナルヲ傳へ
聞入社ノ志アル者
モ時機ヲ圖
リテ加入セントモ
セズ粗雇入ノ内談
ニ及ビシ外國
人ヨリハ確ト條約
ヲ決定セン者ヲ促
シ來レハ再願
書ヲ東京府へ進出
ス抑此事ノ指令遷
延ノ原因ハ漁民ノ
不貫徹ヨリ漁場鯨
網ヲ援カバ尋常ノ
漁事ニ妨害アリト
疑ヒ故障ノ申稟
アルヨシハ前ニ云
フ如シ然ルヲ以テ
房總ノ漁民等ニ西
洋鯨ノ事業ヲ説キ
網ヲ用ルニ非ス且
近海ト云ヒニハ遠
キ外國ノ海ニ

改

對スル言ニテ房總ノ海洋ニ漁事ヲ営ム注視ニ非
カ專目的トスルハ南海小笠原島ノ近海ナル旨ヲ説
カシノシカバ漁民等モ漸ク氷解シ却テ故障ノ申稟
ヲ主張シ巨魁モ會社ノ捕鯨ニ雇ハレ來ラシ事ヲ望
ム勢ニ變シ熱談全ク整ヒシニヨリ尚再願ニハ及シ
也

先達テヨリ外國捕鯨法相聞申度御願申上候處元
來鯨ハ大洋中ノ魚ニテ外國人ノ獵場ハ地方ヨリ
ニ百里三百里ノ所ニテ則チ南ハ無人島近邊尤モ
多獵ハ場所ノ由私共目的ニ仕候モ全ク石ノ邊ニ

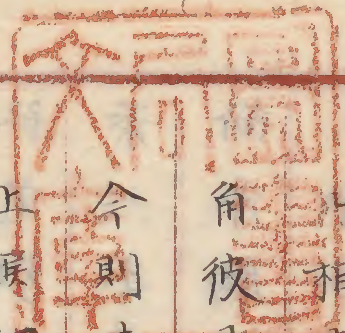
有之左候ハハ鯨ノ地方ハ近寄候モ十五里以外ニ
テ決テ浦方等ノ障リニハ相成不申夫レトモ近海
ニテ取レ地方ハ引付候儀モ有之候ハ其節ハ丈
相應ノ助成筋モ有之其地ノ不為ニハ仕不申免
角彼是延日ニ相成候テハ時節後レニ相成可申只
今則其節ニテ切迫ニ及候間不得止再應御歎願申
上候何卒早ク御聞届願ノ通相濟候様奉願上候以
上

明治六年八月十九日

岐阜縣貫屬

平島正彪

第一大臣十一小臣
神田富山町



大久保一翁殿

平氏
渡邊市造

同九月中旬ニ至レドモ捕鯨ノ申稟可否ノ指令無リ
社中頗ル疑ヒテ生シ疾ク出金ノ者ハ其金ノ約リテ
案ニ未夕出金セサル者ハ危ク三テ出金セズ其為議
論沸騰人心定マラズ此儘因循數日ヲ経ル時ハ已
ノ會社モ瓦解ニ及フヘキ前モ見エ奈起ノ面々大ク
苦心ニ又同二十三日東京府へ再三ノ歎願書ヲ進出
ス
捕鯨ノ目的ト仕候ハ元來無人島ヨリ南ハ豪斯多

辣利迄ノ間最モ多鯨ノ由ニ付石ノ邊ヲ以テ先目
的ニ仕候則當春二月正院へ上書仕候寫御覽ニ入
候石ニ付二百里三百里ノ外ニテ鯨漁仕候事ニテ
内地浦方ノ漁獵ニハ決テ差支ニハ成リ不申候ニ
外國法ト申ハ日本舊來ノ仕法千余人ヲ用ヒ數千
人入費ヲ盡シ僅ニ漁獲仕候トハ異ニシテ僅三十
余人ニテ多獵仕候法ニ有之且外國人雇入候モ無
給銀ニテ獵得ノ分割ヲ与一候約則ニ御座候其有
増別紙ニ御覽ニ入申候
石之通無人島近邊ヨリ鯨獵仕初メ其利分ニテ追

本船ヲ買入候儀先達ニ指上候仕法書ニモ有之
候通り追々本船ヲ増シ唐太ヨリ九州琉球支那海
一モ押出候見込ニ候ハ豆相房總考ノ浦々ニハ
着眼不仕候備石ノ鯨漁モ外國人ノ申候處ニテハ
八月上旬ヨリ鯨獵ノ好時候ト申事ニテ其運ヒ手
仕候處于今御許可モ無之追々時候ニ後ヒ候ノ
テラ不去之月ヨリ雇入候漁夫共ハ八空ク給俸ヲ
賞ヤシ實ニ禁中困却罷在候何卒此事情御明察被
成下早々御免許之程偏奉布上候以上

明治六年九月廿二日

岐阜縣實屬 平島正廳

第一大区十一小区
神田富山町
平民
渡邊市造

別紙

請用鯨利子小笠原書

無人島ハ我南大洋中ニアリ其島數百南方澳地利
ニ連接ス其最近キモノヲ小笠原島ト云小笠原島
ハ我東京ヲ距ル二百八十里許東南洋中ニアリ其
地形ヲ按スルニ其島大ナル周回十里余ニ至ルモ
六ツ其小五里ヨリ以下ノモノ八十一天度二十

島

七度ヨリ二十六度有奇モ至此テ我伊豆ノ諸島
ニ联接ス乃我東京ノ南藩タリ其地我カ版圖タル
言ヲ待タズ然モ我國人絶テ此島ニ住スルモノ無
シ從テ外國人ヲシテ之ニ據ラシム此所謂臥榻之
側他人ノ鼻息ヲ容ルモノナリ今聖化遠ク窮髮ノ
北陸ニ遍クシテ而階前咫尺ノ地ニ及ハズ離婁之
明モ眸前ノ睫毛ヲ見サルニ非ズヤ論スルモノ只
小島開拓ノ利少キヲ以テ棄テ其地ノ切要守ルベ
キヲ問ハズ豈今日ノ長策ナランヤ夫レ土地ハ萬
室ノ殖スル所一寸ノ地モ物ヲ生セザルハナシ既

ニ物ヲ生スレハ之ニ人々テ加ヘ天功ヲ助ケハ何
ソ利ナキノ理アラシヤ窮北不毛ノ地スレ猶莫太
之利ヲ生ス況ヤ彼島ハ陽暖ノ地草木茂暢物産モ
亦饒シ且捕鯨ノ利ニ至テハ實ニ東海ノ福田ト称
ス今捕鯨ノ會社ヲ結ビ大ニコノ海利ヲ開ラカハ
豈啻小笠原島ノミナラシヤ南ハ澳利ノ諸島ヲ至
リ北ハ薩哈噠千島ヲ極メ以テ鯨ノ龍斷ヲ占ムバ
其利豈算テ算フベケンヤ此利ヲ算テ外ハ開拓ノ
礎トナシ内ハ士族保護ノ基トナサント欲ス其事
載テ別書ニアリ仰願ハ政府ノ有位幸ニ高裁ヲ賜

改

其事訃ナレシ事ヲ謹以テ請ヒ奉ル

明治六年弟二月 藤川三溪

此書ニ云フ別書ハ前一載スル捕鯨仕法書ナリ省キテ于此載セス

如此再三ノ懇願ナレドモ豫テ諸縣へ却下問アリシ
近海漁場ノ妨害其有無未ダ上申ナキモ了カニシヤ
湍ニ可否ノ御沙汰モナカリシガ追々各所ノ訴アリ
テ其上申スル可區々ニシテ或ハ五十里外或ハ七十
里外于親縣ノ如キニ至テハ百里外ノ故障ナキ等ノ
説口ヲ上申ス官ニ於テ尚論議ヲ加ヘラレ諸縣人上
申ヲ折衷アリテ陸里ヲ距離事海里七十里外ニテ捕

鯨ノ業ヲ管ハキ旨ヲ許可セラル因テ同十月七日

鯨田業ノ鯨人等ヲ東京府ニ捕鯨出シ官許ノ旨ヲ傳

達ス因ニ云鯨鯨共ニクナラト訓ス和名類聚鈔ニ鯨

曰鯨鯨魚ノ玉也ト見工萬葉集ニハ勇魚或ハ鯨魚ヲ

イサトト訓榮ニ海中大魚ノ大魚ヲテ勇魚ト云ハルヨリ

鯨ヲ和訓榮ニ海中大魚ノ大魚ヲテ勇魚ト云ハルヨリ

以テ知ニ足レリ以テ魚ノ勢ハ亦雅翼ニ鯨以テ京大也常

族ノ一浦一鯨ヲ獲ル以テ其類多シト鯨ハ好テ水面ニ浮ヒテ

物ノ芽一也其種類多シト鯨ハ好テ水面ニ浮ヒテ

此名アリテホウ鯨ハ其色亦シムカハ鯨ハ五ノ鬣

ハ一其餘尚數種也大魚毫末モ指ル所ナシ以テ海里

收

ト見工ニハ布告全書壬申明治五年四月廿四日ノ令ニ今般海軍省ニ於テ別紙之通相定候条其旨可相心得尤海里ハ普通陸里ト不混様可致事トアリ其別紙ニ一海里ハ一度六十丁一ヲ以テ一里ト定ム即陸里十六町九分七釐五毛也一尋ハ曲尺六尺ヲ以テ一尋ト定ム但測量圖海底ノ淺深ハ干潮ノ時間尋數ヲ以テ定ムルモノトス一經度者英國フレニウトナラ以テ暫ク初度トス但我國ニ在テハ東京海軍省標竿ヲ以テ東經一百三十九度四十五分二十五秒零五ト定ムト見ヘタレハ海里ノ一里ハ陸里ノ十六町九分七釐五

毛ニテ三十六町一里ノ半里ヨリ一町二釐五毛近シ此算計ヲ以テ海里七十里ヲ算スレハ百十八町八分二厘五毛トナルヲ以テ三十六町一厘ニ直シ三十三里零々六分九毛四弗四一六ニ當レリ抑

皇國ノ里程往昔ハ關東ト唱ヘ六町ヲ一里トス其ハ東鑑文治五年九月十一日ノ條今朝令立陳岡給自是厨川柵者依為廿五里行程未屬黃昏著御件館ト見ヘ虎関ノ濟北集ニ西自豆駮東距武總沿海濱三百里太平記ニ四方八百里ニ餘レル武藏野トドアルモ愈六町也同書ニ小手差原ヨリ石濱マテ坂東道四十六里

又宇都宮ヨリ武藏國コテヲ坂東道ハ十里ト見エシ
モ六町一里ナルハ勿論也其他最須敬重繪詞廻國雜
記梅花無盡藏宗長手記河越記等ニ記セルモ皆坂東
道ノ定ナレハ前後ノ里程ヲ計リテ知ルニ足レリ
西ハ上道トモ西國道トモ唱ヘテ三十六町ヲ一里ト
ス上道ト唱フルハ甲陽軍鑑ニ春日山城ヨリ才館ノ
城ヘハ上道一里半東道九里也ト見ヘシヲ以テ考フ
レバ上道ハ則三十六町ニテ東道ハ前ニ云フ坂東道
六丁ナルハ論ヲ俟タズ拾芥抄田藉部ニ三十六町爲
一里ト見ヘ東大寺造立供養記ニ木津ヨリ至テ海七

里注ニ三十六町爲一里ナドアルヲ對照シテ関ノ東
西ニテ里程ノ相異リシヲ知ルベシ然ルニ徳川家ニ
太政ヲ委任給ヒシ江戶町地割方樽屋三石衛門カ
家祖幕命ヲ奉シ五街道ニ一里塚ヲ築キ塚標ニ木ヲ
植ニ時總テ三十六町ヲ以テ関東関西ノ差別ナリ一
里ト定メシヨリ五街道筋ハ里程遠近ナシト雖モ邊
限ノ偏路ニ至リテハ或五十町ヲ一里トシ又三十六
町ヲモ一里トスレハ奥ノ邊土今尚六町ヲ以テ一里
トスルモアリトイヘリ却説捕鯨閑業御許客アリシ
カバ先ツ捕鯨傳習ノ爲ニ雇入ニ事ヲ崖畧約シ置タ

大
改

リニ米國人ナヤレトスノツ同國人ジヨキシクニベ
ノニ名ト改メテ條約ヲ結ビ而後雇入ノ免狀願受ラ
其管轄東京府ニ懇願旨ニ隨ヒ添翰ヲ齎ラセ願入ラ
本省ニ出頭サセシム
有テ神田富山町渡邊一孫等今般餘條ノ義河
野ノ事有米國人ナヤレトスノツ同國人ジヨキカーベ右
五人備入ノ義條約草案ト以別紙ト通致出テ間不致合
カニ廉也等之在ニ備入ノ狀ニ渡邊一孫等之在ニ隨ヒ送ラセ也
明治六年十月三十日
東京府知事大塚一翁
外務卿寺島宗則殿

此ノ事又米國人ノ義河條約書ニ同國領事多様
印等之在ニ其支子之在ニ其出テ其同也

條約書和文及横文ヲ副タリ

條約ノ件々外國人雇入規則ニ違却ノ慮ハナシト雖
モ和文ト横文ト對照スルニ些カ脱文アルニ似タリ
因テ兩文ヲ改正シ一字一点ノ差異ナキ同一ノ譯文
進出ノ後免狀ヲ通与スハ勿論ナレトモ條約ノ日限
切迫ニシテ延及バ、大ニ機會ニ後レ不都合ノ
内話其情實モ亦餘義ナク聞エレハ免狀ハ通与スベ
シ通ニ脱文ヲ補ヒ進出スベキ旨ヲ演達シ免狀ヲ通

大 改

通与不同十一月附脱日 條約書附文ヲ補ヒ東京府ヨリ
達ニ米ル

神田富士町渡邊一航米國人傭入之儀ニ付平造在
身其後免状ハ渡邊五郎左トシ條約書中 附文有之認換紙
人ハ此邊有之者處ニ別列出認換紙ニ免状有之洋文ニ通
日譯文ニ冊抄スルニ其条此處ニ有之候也

六年十一月

東京府

外務省の中

表紙 條約書譯文

捕鯨社中東京府下第一大區十一小區神田富士

町十五番地平民渡邊而造米國人千ヤレースニ
ツラ雇入儀ニ付左ノ條ヲ約ス

第一條

一 米國人千ヤレースニツラ鯨漁ノ為ノ明治六年十
一月五日ヨリ明治七年四月七日迄六ヶ月ノ間相
雇候事

但十一月五日ヨリ東船ニ付本日ヨリ雇入船住
居之事

第二條

一同氏給料ハ一月ニ付日本貨幣百圓ト定メ毎月

月末ニ相渡候事
但月給ノ外食料トシテ日本貨幣ニ十五圓毎月
ニ末ニ相渡候事

第三條

一 雇中總テ社中ヲ守ルヘシ同氏議スル所ノ事件ハ
都テ決テ社中ニ取ルヘキ事

第四條

一 雇中日本政府ノ法令ニ背カサルヘシ若シ此結約
ニ付異論生スルニ兩國交際上ニ關係マサルヘキ
事

第五條

一 雇中開港場ノ外探ニ上陸ヲ許サズ假令開港場夕
リトモ上陸ノ節ハ社中ノ者一人指添候事

第六條

一 雇中商法筋ニ關係不致事

第七條

一 日本祭日其他臨時ノ休暇ハ其時々社中ヨリ告ス
ルキ事

第八條

一 社中ヨリ定ムル所ノ休日ノ外同氏隨意ニ休業ス

ルトキハ其日數ノ給料可引去事

第九條

一 雇中同氏船中食料衣服其外用ル品ハ一切同氏ノ自費タルヘキ事

第十條

一 雇満期ノ後引続キ雇入ルトキハ期限以前ニ其事ヲ可相示事

第十一條

一 雇期限中同氏無故約ヲ破レハ償金五十圓ヲ出ス

第十二條

一 雇期限中不得止事アリテ雇ヲ止ムルトキハ期限中給料ノ内ヲ一月分可相渡事

第十三條

一 同氏其職ヲ怠ルカ或ハ過失有之トキハ期限中トイヘドモ雇ヲ止メ其日ヨリ給料不相渡事

第十四條

一 雇期限中病ニ罹リニ週間ヲ過ルトキハ自費ヲ以相當ノ代人ヲ出スヘシ又ニ週間ヲ經テ猶愈ヘサレハ此條約ヲ廢シ其日ヨリ給料不相渡事

但急病ノ病死或ハ變故アルトキハ直ニ近傍ノ
町領事ニ引渡シ其日ヨリ雇ヲ止メ給料不相渡事

一 本州神田第一小區十一小區
東京第一小區十一小區
神田富山町十五番地平民

明治六年十月五日
渡邊市造

表紙 條約書譯文

捕鯨社中東京府下第一大區十一小區神田富山

町十五番地平民渡邊市造米國人シヨ―ジカ―

一 本州神田第一小區十一小區
東京第一小區十一小區
神田富山町十五番地平民

雇入候ニ付庄ノ條ヲ約ス

第二條

一 米國人シヨ―ジカ―バヲ鯨漁ノ為メ明治六年十

一月五日ヨリ明治七年四月七日迄六ヶ月ノ間相

雇候事

但十一月五日ヨリ乘船ニ付本日ヨリ雇入船住

居之事

第二條

一同氏給料ハ一月ニ付日本貨幣二十五円毎月ニ

末ニ相渡候事

但月給ノ外食料トシテ日本貨幣二十五円毎月

末ニ相渡候事

第三條

一 雇中總テ社則ヲ守ルベシ同氏議スル所ノ事件ハ都テ決ラ社中ニ取ルヘキ事

第四條

一 雇中日本政府ノ法令ニ背カサルヘシ若シ此結約ニ付異論生スルハ兩國交際上ニ關係セサルヘキ事

第五條

一 雇中開港場ノ外據ニ上陸ヲ許サズ假令開港場外ノ開港場上陸ノ郎ハ社中ノ者一人差添候事

第六條

一 雇中商法筋ニ關係不致事

第七條

一 日本祭日其他臨時ノ休暇ハ其時ニ社中ヨリ告知スヘキ事

第八條

一 社中ヨリ定ムル所ノ休日ノ外同氏隨意ニ休業スルトキハ其日數ノ給料可引去事

第九條

一 雇中同氏船中食料衣服其外用ル品ハ一切同氏ノ

自費タルベキ事

第十條

一 雇満期ノ後引続キ雇入ルトキハ期限以前ニ其事ヲ可相示事

第十一條

一 雇期限中同氏無故納ラ破レハ償金五十圓ヲ出ス

第十二條

一 雇期限中不得止事アリテ雇ヲ止ムルトキハ期限中給料ノ内ヲ一ヶ月不可相渡事

第十三條

一 同氏其職ヲ怠ルカ或ハ過失有之トキハ期限中ト雖モ雇ヲ止ノ其日ヨリ給料不相渡事

第十四條

一 雇期限中病ニ罹リニ週間ヲ過ルトキハ自費ヲ以テ相當ノ代人ヲ出スベシ又ニ週間ヲ経テ猶愈ヘカレハ此條約ヲ廢シ其日ヨリ給料不相渡事

但急症ノ病死或ハ變故等アルトキハ直ニ近傍ノ領事ニ引渡シ其日ヨリ雇ヲ止メ給料不相渡

事

東京第一大区土小區
神田富山町十五番地平民

明治六年二月五日 渡邊市造

右各横文ヲ附ス

先是同九月廿九日本省七等出仕森山茂書ヲ塚本少
内史ニ贈リ先月十三日上陳アリシ小笠原島制取ノ
廷議ヲ問

小笠原島一件ニ付先般本省より申出に未だ議の何程
有決否我及同令を以て
明治六年九月二十五日 外務省出仕森山茂

只收領ノ鈐印而已ニテ廷議可決ノ回答ナシ同十一

月十四日大藏省ヨリ左ノ書翰到來ス

東京府下神田富山町邊に市邊分敷石ノ右捕鯨會
社設立外國鯨極法ノ以近海島嶼ノ深ク遠ク大洋中
ニ於テ捕鯨ノ爲ニ取出ル鯨ノ肉酒方漁業ノ妨ニ
多ク不可然ニ在陸地距離海里七十里以外ノ鯨ノ鯨
肉ヲ捕ルニ尤モ會社ノ作ルニ白地ニ赤ク捕鯨ノ形
象ト畫
キ小旗ト立テ夜又ニ捕鯨ノ至國ノ白ク吹ルニ揚
旗ト立テ其ノ間至テ右ノ洋中ニ白ク揚旗ト立テ

大收

殊ニ捕鯨ノ行ハ小銃余砲山段ノ事ニ自然ナリ國艦徑
以テ舟觸目ヲ義山ノ事ニ方所々有像ヲ為ル以テ此所及以照管

也

明治六年十一月十四日

大藏卿大隈重信

外務卿寺島宗則及

先是前外務卿

副島 禮臣

辭職ニ目テ特命全權公使

宗則

ヲ參

議兼外務卿ニ任セラレ當時ノ現任ナリヨリ前ノ

書翰ト宛名相異レルナリ

同廿八日去ル十四日大藏卿ヨリ捕鯨船旗章發炮等

外國船艦觸目ヲ示ルベク豫テ心得ノ為報知ス

トノ來翰一應省議ノ上左ノ書ヲ大藏省ニ贈達ス

大藏大少丞

外務大少丞

山中

府下神田富少町渡辺市藏外務名ノ合捕鯨會社設

立近海島嶼之際ヨリ遠ク大洋中ニ鯨獵ヲ營茲茲立

存陸地距離海里七十里以外ニ於テ鯨獵ニ差許ス

然分國艦徑道ノ岸觸目ヲ儀ル可省之儀ニ豫メ為記長官

以テ裁之趣者ハ捕鯨目標トシテ小銃並吹貫引上ケ且小銃

奈炮ヲ義トシテ通リ控除每日出板外國新聞ヲ以日社

ヲ名ト若一布告致一並可ハ可然ト為テ依ル此所ニ進出

大藏

明治六年十一月廿八日

同十二月三日太政官ヨリ改テ左ノ令ヲ下サレ
外務省

東京府下神田富山町邊市邊外敷名ノ合開洋
社ト唱ヘ外國鯨獵法ヲ以捕鯨營業爲一處者預知此旨
海方漁業之妨害不有成陸地距離海程七十里以外
於之鯨獵差許尤若船印トシテ白地ニ赤ク揚陸之形
ト画一ト小旗相用又相圖トシテ紅白之吹母相掲ケ且
小銃茶炮ヲ兼テ用テ差許ニ條此者可相心付事
但小旗繪圖ト違フ方若省ヨリ可テ違事ト

明治六年十二月三日

右大臣岩倉具視

同九日外務卿具狀シテ去ル八月十三日前外務卿ヨ
リ上申アリシ小笠原島御處分ノ延議于今可否ノ御
沙汰ナシ因テ迅速御決議ノ御指令ヲ請ハル

小笠原島御處分ノ儀ニ付再應陳述

小笠原島之儀ニ付中島祖稅權願申立書年大務省
上陳之書因テ相議先取テ下問者之旨ニ過ル八月
中務省見込云々申進置キ委米以決定不有成
同島之義ハ他家之別制並不段殊ニ方今多人被分
國人任居獨一其ニ付通テ白方旗並テクニ被見

大政

丁林伊太利白耳義等ノ各國ハ其公使館ハ秘魯葡萄
牙布哇瑞西等ノ各國ハ同様領事館ニ布達シタリシ
ナリ其ニ布達ノ文各國同文也

今般象國人會社ト結ビ蘇俄ノ差款出シニ付公紙之
通美許ノ案為心沙及此画達也

明治六年三月十日

外務省

英國公使館

別紙

東京府下神田富山町渡辺市達外務省

東京府下神田富山町渡辺市達外務省

同方唱ハ可國蘇俄法ト以テ捕鯨營業法ト成テ

其ニ日滿方漁業之妨害不取成極陸地距離海程七

十里以テハ其ノ蘇俄許尤右船印云々白地

ニ赤トク情吟之形々ト画シ小旗五圓トク左圖ト

トク白之吹貫お掲布且小汽釜炮ヲ像トク差許

トク案此古可右心作事

明治六年三月三日

右大臣岩倉具視

同十二日互ノ書翰ヲ大藏省ニ贈リ捕鯨船ノ旗章及

相圖發炮等ノ事改テ正院ヨリ御下令アレハ最前

殊更外國人ハ布告ニモ及聞敷由回答及

正

丁林伊太利白耳義等ノ各國ハ其公使館ハ秘魯葡萄
牙布哇瑞西等ノ各國ハ同様領事館ニ布達ニ夕リシ
ナリ其ニ布達ノ文各國同文也

今般象國人會社ト結ビ鯨獵ノ委託出スニ其旨紙ニ
通美許ノ條為心沙及此画達也

明治六年三月十日 外務省

英國公使館

別紙

外務省

東京府下神田富山町渡辺市達外務省中合開洋社

同方唱ハ可國鯨獵法ト以テ捕鯨營業法ト為テ既出

ルニ日捕方操業之妨害不有或極陸地距離海程七

十里以分ニ其ノ鯨獵美許尤右船印ニトク白也

ニ赤トク防鈴之形ト画シ小旗五圓ト

トク紅白之吹貫取掲テ且小汽釜炮ヲ像トシ美許

ヲ条以告可右心作事

明治六年三月三日

右大臣岩倉具視

同十二日左ノ書翰ヲ大藏省ニ贈リ捕鯨船ノ旗章及

置ニカドモ又省議ノ上各國公使領事ハ布告ニ趣

フ通達ス

鯨獵法
捕鯨船
旗章

正

府下神田富山町設造市造省申合捕鯨會社取設中
像二日先頃中方之九一越有之存者多涉多之吾國人民
布達之不及者九回答一八思之處為省豫之上列
紙之通名之使領一右達之條法者九心將申入也

明治六年十二月十二日 外務省 大藏省

大藏省 大少丞

各國公使館領事館へ入書簡寫原封申取申入
同十三日大藏省より捕鯨船旗章圖ヲ達來ル

外務省

大藏省

抄中

過頂以通達以之申開洋社船印小旗并吹賣
之儀正院以抄法之乃身以有之申別紙圖面以
廻一申也

明治六年十二月十三日

大藏省

捕鯨船ノ印旗

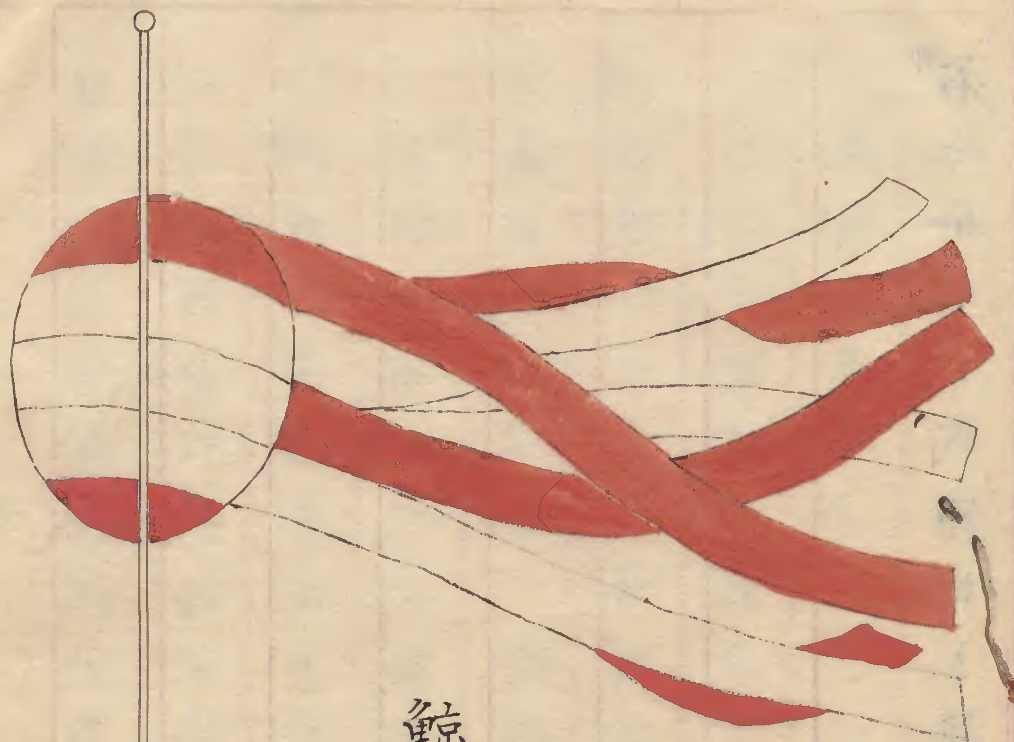


秋津洲ノ地形

蜻蛉ニ似タリ

ニ象ル

鯨ヲ獲ルノ相圖旗



文

同十五日獨逸公使フオンブランド本省ハ出頭御
出會應接ス其應接記ノ内

捕鯨會社取結候儀布告ニ付云々之事

御國人捕鯨會社と請ひ候儀ニ付此程御達之趣
にてハ海岸七十里と距るの外ハ差訶との事難
解石里敷以月ハ御領分と被思召候哉滄范围
管領ふけきハ外國小てハ大砲の彈丸達を
と以て管界と致居候間石七十里との儀ハ何分
難得其意候

石^即七十里ハ我領地と認候儀ニハ固ヨリ無之石里

程以内ハ外ハ換船モ有之候ニ付是等ノ妨から
亦採達置儀ニ有之候尤七十里内外之事ハ大概
以下ハ譯ヨク強て分界を確定致候譯ニ有之間
敷志^一七十里とハ餘り遠界過き^一と
多^日微笑見元

英國杯小^獨ハ二十里位を以て界とす

同廿三日豫テ上申ノ小笠原島一件本日正院ノ御指
令到來ス

小笠原島之儀者舊幕府於テモ官吏差遣ニ取締有
既ニ判然之處維新以來御多端之際改テ御處置

然之今日ニ至迄其儘被差置候處外國船之内往々
同島へ向テ出帆免狀申請候者モ有之彼是不都合
不少ニ付而者今後相當之施設ヲ以テ島民撫恤土
地取締及船艦往來之規則等ヲ相立漸々殖民漁塩
種藝ヲ始土地適宜之利益ヲ興シ全島羈縻ノ術ヲ
被爲盡候御旨意ニ付大藏海軍兩省へ協議之上差
向着手ノ順次取調可向出此旨相達候事

明治六年十二月廿三日

右大臣岩倉具視

御指令如此ト雖モ本年己ニ月迫年内兩省トノ協議
ニ届難ク此儘新年ノ来ルヲ俟テリ

此書明治六年一月二日ヲ限リニ止ムト雖モ本書
ニ所載ノ御指令ニ因テ本省ノ稟議同七年一月
廿九日ニ進出アリシ旨趣ヲ書
載々御指令ノ顛末ヲ全クス

明治七年一月廿八日

外務大小丞

土方大内史

御中

小笠原島處分ノ儀ニ付昨十二月中御達之趣
有之候處未御省議御上申無之石者差急候ニ
付至急御稟議有之度此段申進候也

明治七年一月廿八日

右ニ就翌廿九日左ノ趣ヲ上陳ス

太政大臣三條實美殿 外務卿寺島宗則
小笠原島處分之儀上申

小笠原島處分之儀昨年十一月御達之趣も有
之候ニ付本省意見稟議可仕趣致兼知候就而
者海軍省ヨリ年中ニ度敷と定メ船艦往来ヲ
関キ外ニ官員ヲ撰テ在勤セシメ前年舊幕府
ヨリ同島處分の方畧ニ倣リハ移住之外氏ヲ
管束シ實地ヲ目撃シテ逐漸開拓之方法ヲ定
メ畢竟御國版圖多クノ實權外人見認の候株
相成候得指可然巨細者昨年八月前外務卿副

島裡臣ヨリ建白之通小候但一外交ニ関セ
事務ハ本省職掌ニ候得共同島處分ノ儀者即
今内務省之主任与存候此段上申候也

明治七年一月廿九日

同廿四日去ル十五日獨公使出頭對話ノ序ニ質問ス
ル所ノ捕鯨里程兼テ本省ニ於テモ不審ナキニシモ
アラネハ本日左ノ書ヲ史官ニ達シテ里程定規ノ所
以テ質問ス

史官

外務大少丞

御中

過ル三日御達相成候東京府下神田富山町渡邊一
藏外数名申合開洋社と唱へ外國鯨獵法と以捕鯨
管業願ひ御達面中ニ海程七十里以外と有之右七
十里以外とハ何事之故御取極相成候哉
於當省心得度儀有之委詳御申越有之度此段及御
問合候也

明治六年十二月廿四日

此書明治六年十二月ヲ限リニ止ムト雖モ本文
ニ所載ノ海程七十里以外ニ於テ捕鯨管業ノ御
許可其定程ノ一條ニ就キ同七年一月廿二日
官ヨリノ由答來ル因テ其書ヲテ此答ヲ往復ノ
首尾ヲ全クス

開洋社捕鯨管業海程七十以外ト取極相成候
次第御問合之趣致兼知候右者海岸ニ由リ
管業候而者浦方漁夫共元妨害不少相既ニ近
傍縣々竟見照會候節千葉縣之如キハ百里以
外之許可ニ相成度申立ル有之程之儀ニ付彼
是折衷の上七十里以外ト定限相成候事ニ有
之候此旨御承知可有之候也

明治七年一月廿二日

外務大少丞

御中

史官

大正
正
正

Vertical columns of faint Japanese text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is arranged in approximately 15 columns, reading from right to left.



The left page of the document is mostly blank, showing the texture of the aged paper and some minor smudges or foxing.

